

# *Dorian Gray* の隠し絵 もしくは隠し絵としての *Dorian Gray*

松田 信恵

Oscar Wilde の *The Picture of Dorian Gray*<sup>(1)</sup> の中心にあるのは *Dorian Gray* の魅惑的な肖像画である。それは我々の目からは隠されているが、我々を魅きつけて止まない。

この隠された肖像画を探し出そうとする試みは、しばしば *Dorian Gray* の由来の探究と相俟ってなされて来ている。今までに *Dorian Gray* の肖像画とされたものには二つある。第一のものは、1904年ニューヨークの Charterhouse Press の出した *Dorian Gray* の海賊版に付けられていた “*Dorian Gray* の肖像画” である。そこにはまた、“Basil Hallward” による次のような “The Artist’s Preface” があり、その肖像画の由来を、そして *Dorian Gray* の由来を説明していた。

During the Spring of 1884 Oscar Wilde was often in the studio. One of my sitters was a young gentleman of such peculiar beauty that his friends had nicknamed him “The Radiant Youth.”...

“What a pity such a glorious creature should ever grow old,” sighed Wilde.

“Yes, it is indeed,” said I. “How delightful it would be if ‘Dorian’ could remain exactly as he is, while the *portrait* aged and withered in his stead. I wish it might be so!”<sup>(2)</sup>

Boris Brasol はこれを *Dorian Gray* 発生の起因と信じ、その画家を如何な

る理由からか Basil Ward としたが、かなり最近に到るまでこの見解は踏襲されてきている。<sup>(3)</sup> 第二のものは、1887年に Francis Richards という画家が描いた Wilde の肖像画だという、Osbert Burdett の見解である。<sup>(4)</sup> しかしながら、これらの肖像画は依然として謎に包まれており、隠された肖像画は明らかにはなっていないのである。

Wilde は芸術の自律性を強く主張し、芸術が自然を模倣するのではなく、自然が芸術を模倣すると述べたのであった。このような Wilde の *Dorian Gray* の肖像画を、そしてこの作品の由来を外在の現実世界に求めるのはそもそも不毛な試みと言えるのではないだろうか。我々は Wilde の想像力の中の *Dorian Gray* の肖像画を捜すことによって、この肖像画が如何なるものだったのかを考えてみたい。そしてそれによって、Wilde の作品形成の一つのあり方に光をあてることができるのではないだろうか。

## I

Wilde の全作品中で、肖像画と何らかの係わりを持つ最初の作品は、1877年、Wilde が22才の時に *Kottobos* に発表した “Wasted Days: (From a Picture Painted by Miss V. T.)” というソネットである。

A fair slim boy not made for this world's pain,  
 With hair of gold thick clustering round his ears,  
 And longing eyes half veiled by foolish tears  
 Like bluest water seen through mists of rain;  
 Pale cheeks whereon no kiss hath left its stain,  
 Pale under-lip drawn in for fear of Love,  
 And white throat whiter than the breast of dove—  
 Alas! alas! if all should be in vain.  
 Corn-fields behind, and reapers all a-row  
 In weariest labour, toiling wearily,  
 To no sweet sound of laughter, or of lute;

And careless of the crimson sunset-glow,  
 The boy still dreams; nor knows that night is night,  
 And in the night-time no man gathers fruit. <sup>(5)</sup>

この Miss V. T. が誰であり、この肖像画が誰のものかはわかっていない。しかし “The Artist’s Preface” における 1884 年より早い 1877 年に既に、Dorian Gray の肖像画を予期させるような美青年の肖像画が Wilde の作品に現われており、美青年と時間によるその美の破壊というテーマを扱った、Shakespeare の *Sonnets* を想起させるようなソネットが書かれているという事は、注目すべきことであろう。

肖像画が扱われる次の作品は 1887 年の “The Model Millionaire” であるが、ここでの肖像画は美青年のものではなく、Dorian Gray の肖像画の系譜につながるものではない。Dorian Gray の肖像画と密接な関係にある作品は、肖像画が扱われている残りの作品、*The Portrait of Mr W.H.* <sup>(6)</sup> である。*The Picture of Dorian Gray* と *The Portrait of Mr W. H.* はその題名からも距離の近さが推察されるが、この二作品はほぼ同時期に執筆、改訂されている。*Mr W. H.* は 1889 年に雑誌に発表された後、1893 年頃まで改訂を続けられていたが、一方 *Dorian Gray* は 1890 年に雑誌に発表され 1891 年に改訂版が出版されている。このような二作品に共通して重要な役割を担っている美青年の肖像画とは、どのようなものだろうか。

“Wasted Days” を書いた時、Wilde の念頭には Shakespeare の *Sonnets* があったと思われるが、*Mr W. H.* は *Sonnets* に関する論文とも考えられる。ここでは、その献辞の Mr W. H. は Shakespeare 一座の女形の美青年 Willie Hughes であったという理論が展開されているが、この理論が Willie Hughes の偽造の肖像画をめぐる物語的枠組の中で語られているのは何故だろうか。この作品は全篇を通して一人称で書かれているが、“I” が Erskine の見せる肖像画に魅かれるのが物語の発端である。Erskine は肖像画を彼に遺して自殺した友人 Cyril Graham について、そして Cyril の考え出した Willie Hughes 理論について語る。“I” はその理論を更に綿密なものにし、

その理論を信じていない Erskine を説得するが、Erskine は“I”に肖像画を遺して死ぬのである。

ここでその肖像画が偽造のものだということに注意しよう。Cyril は *Sonnets* の純粋に内的根拠から Willie Hughes を読み取るが、彼がその唯一の外的根拠として偽造したのがこの肖像画なのである。Erskine は“I”の眼前から“rather abruptly” (p. 154) に肖像画を取り除け、Cyril をめぐる話を始める。次に“I”がそれを見るのは Erskine にそれを遺贈された時である。物語は次の言葉で終わっている。

...when I look at it [the portrait], I think there is really a great deal to be said for the Willie Hughes theory of Shakespeare's Sonnets. (p. 220)

ここで既に語られた物語は肖像画に収斂される共に、再び発端に戻り、永遠に語り続けられるべきものとなる。この Willie Hughes 理論はその肖像画と同様に虚構のものなのであり、語り続けなければ崩れ去る芸術の世界のものである。<sup>(7)</sup> “a trail that leads to nowhere” (p. 167) である Willie Hughes 理論は、この物語的枠組と密接に呼応し、芸術の自律性、もしくは芸術批評の自律性を主張しているのである。

このように、この肖像画は Willie Hughes の肖像画ではあっても、現実の Mr W. H. のものではないのである。それならこの偽造の肖像画は誰をモデルにしているのだろうか。この肖像画は“of quite extraordinary personal beauty, though evidently somewhat effeminate.” (p. 153) と描写されているが、この姿は“effeminate” (p. 155) であり、“the most splendid creature I [Erskine] ever saw” (p. 156) である Cyril 自身を思い起こさせる。Cyril をめぐる話は Willie Hughes の肖像画が取り去られて初めて語られるが、その時 Cyril は Willie Hughes と同じ顔をしているのである。Willie Hughes とは、Shakespeare 劇の女形を演じていた美青年 Cyril が *Sonnets* に読み取った自分自身の姿ではないだろうか。彼は肖像画を偽造

したことを咎められて自殺するが、それによって彼は肖像画と合体し、肖像画として再生したと言えよう。Cyril にとって *Sonnets* は自分自身を写し出す鏡だったのであり、Willie Hughes の肖像画とは *Sonnets* に写った Cyril の肖像画なのである。

それでは、Willie Hughes の、そして Cyril の肖像画の細部を見てみよう。そしてそれを Dorian Gray の肖像画と較べてみよう。Willie Hughes は “the closely cropped hair, ... the face, with its dreamy, wistful eyes and its delicate scarlet lips” (p.153) を持っており、Cyril は “He certainly was wonderfully handsome.” (p.156) と描かれている。この二つの描写を合わせると、Dorian Gray の描写となる。

He was...wonderfully handsome, with his finely-curved scarlet lips, his frank blue eyes, his crisp gold hair. (II, p.23)

この二つの肖像画についての最初の描写はそれぞれ次のようである。

It was a full-length portrait of a young man... He...was of quite extraordinary personal beauty. (*Mr W.H.*, p.153)

... the full-length portrait of a young man of extraordinary personal beauty... (*Dorian Gray*, I, p.7)

これらの肖像画は “Wasted Days” における肖像画とも驚くべき一致を示しているが、更に比較を続けよう。Cyril は “often wilful and petulant” (p.156) であり、Dorian Gray は “a wilful, petulant manner” (II, p.22) を持っている。その生いたちにおいても、二人は同一人物であるかのようである。二人共、貴族の並外れて美しい娘と爵位のない男との間の一人息子であり、母親譲りの美貌を持っている。両親は共に不遇な死を遂げており、娘の結婚を決して許さない母方の昔気質の祖父が後見人となっているのである。

それなら、Dorian Gray の “the fatal portrait” (XIII, p.177) は “the fatal portrait of Willie Hughes” (p.219) と同じものなのではないだろう

か。Dorian Gray の肖像画の系譜を Wilde の作品の中でたどってゆくと、我々は Shakespeare の *Sonnets* との係わりを見出すのである。

## II

Wilde の想像力の中の Dorian Gray の肖像画が Shakespeare の *Sonnets* を意識させるものであるなら、*Dorian Gray* と *Sonnets* との間にはどのような関係があるのだろうか。まず、*Mr W.H.* を間に置いて、Dorian Gray の生涯と Wilde が *Sonnets* から読み取った Willie Hughes の生涯とを照らし合せてみよう。

Wilde は *Mr W.H.* において *Sonnets* を四部に分け、Willie Hughes の生涯を組み立てている。一部は I から XXXIII である。ここで Shakespeare は Willie Hughes に俳優になるよう勧め、Willie Hughes は彼の劇団に加わり、“the very corner-stone of Shakespeare’s art; ... the very incarnation of Shakespeare’s dreams” (p.160) となるのである。Shakespeare と Willie Hughes のこの関係に対応するものが、肖像画が完成するまでの Basil Hallward と Dorian Gray の間に見られる。Dorian Gray は Basil Hallward にとって、“the visible incarnation of that unseen ideal whose memory haunts us artists like an exquisite dream” (IX, p.128) なのである。

二部に当るのは CXXVII から CLII のいわゆる dark lady sonnets である。Wilde はこれを XXXIII から XL の間に挿入すべきものとし、この恋愛は Willie Hughes が Shakespeare と出会って間もない頃に起こったと考えている。*Dorian Gray* における唯一の女性関係である Sibyl Vane との恋も、肖像画が完成して一月足らずのうちに起こる。ここで Sibyl が Shakespeare 女優であるということは重大な意味を担っている。Dorian Gray は “I have been right...to take my love out of poetry, and to find my wife in Shakespeare’s plays?” (VI, p.88) と言う。彼にとって Sibyl は Juliet であり Rosalind であって、現実の彼女はその名 “Vane” が “vain” に

通じているように虚の存在でしかない。そのような彼女は Shakespeare 劇の中に生きるのを止めると共に、*Dorian Gray* の世界から去る。dark lady sonnets とはソネットの伝統的な fair lady を逆転したものと言えるが、*Dorian Gray* ではそれは更に逆転され、Shakespeare 劇中の fair lady が恋人となるのである。*Dorian Gray* の世界は現実と芸術が完全に逆転した世界なのであり、それはいわば Shakespeare 劇の観客席ではなく、舞台から見た世界なのである。このように、前半に置かれた dark lady sonnets は *Dorian Gray* における “this white girl” (IV, p.67) である Sibyl Vane との恋に対応しているのである。

三部はいわゆる rival poet series である。時間的順序の上でこれに正確に対応するものは *Dorian Gray* には見出せない。しかし *Dorian Gray* は Lord Henry に出会った時から彼に魅せられ、Basil Hallward の画室に姿を見せなくなり、Basil を苦しめる。*Dorian Gray* をめぐるこの二人の関係は一部に相当する部分から起こるが、ここには rival poet の影が見られるのではないだろうか。

四部は C から CXXVI である。ここでは Willie Hughes は *Dorian Gray* と同じく、永遠の若さを持っているとされている。

Time seems to have listened to Shakespeare's prayers, or perhaps Willie Hughes had the secret of perpetual youth. (p.196)

*Sonnets* の最終部と考えられている CXXVI では Willie Hughes は次のようである。

Evil rumour has now stained the white purity of his name,  
but Shakespeare's love still endures and is perfect... and the  
Sonnets conclude with an envoi of twelve lines, whose motive  
is the triumph of Beauty over Time, and of Death over Beauty. (p.206)

この Willie Hughes の姿は Dorian Gray の姿と寸分違わぬものである。更に *Dorian Gray* は18年間を扱っているが、*Sonnets* で扱われている Willie Hughes の生涯は何年間であろうか。Wilde は次のように Shakespeare と Willie Hughes の出会った年代を推定している。

... in 1594 he [Shakespeare]...had already been acquainted for at least three years with Willie Hughes. (p.205)<sup>(8)</sup>

すると1591年には Willie Hughes と出会っていることになるが、それから *Sonnets* 発刊の1609年まではちょうど18年間なのである。このように、19世紀末の美青年 Dorian Gray はエリザベス朝の美青年 Willie Hughes の再現であるかのように見える。そして *Dorian Gray* は Wilde の読みによる *Sonnets* の再現のようではないだろうか。

*Mr W. H.* を媒介としないでも、*Dorian Gray* と *Sonnets* との間には多くの類縁関係が見られる。*Dorian Gray* は“Days in summer...are apt to linger” (I, p.18) という Lord Henry の予言通り“eternal summer”を保つのであり、“Thou art all my art”と *Sonnets* にあるのに対し、Basil は“He [Dorian] is all art to me now.” (I, p.16) と言う。そして Dorian Gray は“Time is jealous of you [Dorian], and wars against your lilies and roses.” (II, p.30) の如く *Sonnets* を思い出させるようなメタファーで描写されると共に、ここに見られるような時間の観念、すなわち *Sonnets* においてしばしば見られる美の破壊者としての時間という観念は *Dorian Gray* の一つのテーマとも考えられるのである。

Wilde は *Dorian Gray* と *Sonnets* の、もしくは *Mr W. H.* の関係に一言も触れていない。しかしこのように見えてくると、それは彼が *Dorian Gray* と *Sonnets* の係わりを深く意識していたことの逆証明となるのではないだろうか。*Dorian Gray* の肖像画とは Wilde が *Sonnets* から読み取った Willie Hughes の肖像画なのである。この隠された肖像画は、*Dorian Gray* 執筆中、彼の書齋に掛けられてあった筈の Willie Hughes の“本物の”肖像画な



のである。1889年秋に Wildeが Charles Ricketts に描かせたこの肖像画が、<sup>(9)</sup> 隠し絵としての *Dorian Gray* となったと言えよう。

### Ⅲ

Dorian Gray の肖像画は Charles Ricketts の描いた Willie Hughes の肖像画であった。それなら、Dorian Gray の肖像画には、そして *Dorian Gray* には外在のモデルがあったということになるのだろうか。そして *Dorian Gray* の種本探しの核となっている “a poisonous book” (X, p. 140) とは Shakespeare の *Sonnets* であると言えるのだろうか。

“a poisonous book” が *Mr W.H.* における *Sonnets* に似た性格の本であることは確かである。その本に Dorian Gray は次のような感じをうける。

Things that he had dimly dreamed of were suddenly made real to him. Things of which he had never dreamed were gradually revealed. (X, p.139)

一方 *Mr W.H.* における *Sonnets* は次のような本である。

How curiously it had all revealed to me! A book of *Sonnets*, published nearly three hundred years ago... had suddenly explained to me the whole story of my soul's romance.

(pp. 211-212)

このようにこれらは啓示的な本なのであり、その啓示とは自分自身の姿を明確にされることなのである。すなわち、これらの本は鏡の役割を果しているのではないだろうか。

*Mr W.H.* において *Sonnets* を鏡とするのは Cyril のみではない。“I” もそれを “the story of a life that had once been mine” (p. 210) と感じ、次のように Shakespeare に自分自身の姿を見る。

I saw “As You Like It,” and “Cymbeline,” and “Twelfth Night” and in each play there was some one whose life was bound up into mine... (p.211)

そして“I”が“it was in this century that it had all happened” (p. 211) と言う時“I”は、Mr W. H. = Cyril, Shakespeare= “I” という配役で *Sonnets* が *Mr W. H.* において再現されたことを認めているのである。鏡とはそれ自体では何の意味も持たず、鏡の意味とは、それを見る者がそこに持ち込むものなのである。*Mr W. H.* は Willie Hughes を Mr W. H. として Wilde の書きかえた *Sonnets* であり、*Mr W. H.* における鏡としての *Sonnets* は *Mr W. H.* 自体を写し出しているのである。

*Mr W. H.* における *Sonnets* は *Sonnets* と明言されながらも、*Mr W. H.* の内部にしか、そして *Mr W. H.* 自体としてしか存在し得ない虚構の *Sonnets* となっている。それではそれとよく似た、*Dorian Gray* の表題のない “a poisonous book” とはどのような本だろうか。*Dorian Gray* はこの本を次のように感じる。

The hero... became to him a kind of prefiguring type of himself. And, indeed, the whole book seemed to contain the story of his own life, written before he had lived it.

(XI, p.142)

*Dorian Gray* が Willie Hughes の再現であることを見てきた我々には、この主人公が Willie Hughes であり、この本が *Sonnets* であることは自明のことと思われる。それと同時に、この原 *Dorian Gray* も *Mr W. H.* における *Sonnets* のように、鏡となって “the story of his own life” を写し出しているのである。Wilde は次のように述べている。

The book in *Dorian Gray* is one of the many books I have never written, but it is partly suggested by Huysmans’s *A*

*Rebours*, which you will get at any French bookseller's. <sup>(10)</sup>

Dorian Gray の姿を写し出している Wilde の書かなかった本とは、Wilde の書いた *Dorian Gray* 自体ではないだろうか。

Wilde の想像力の中の “a poisonous book” は *Sonnets* であるが、完結した作品としての *Dorian Gray* においてはそのことの痕跡は抹殺されてしまっている。実在の本に向けて開かれていれば、*Dorian Gray* の自足した芸術空間は破壊されようし、それが *Sonnets* であれば、Wilde の性向を糾弾したがっていた人々に格好の武器を与えたことになったであろう。人々がこの本を *A Rebours* と考える限り、この本の素性は、そして Dorian Gray の素性は見破られない。*A Rebours* を隠れ蓑として、Wilde は *Dorian Gray* の現実との係わりを抹殺したのだと言えよう。Wilde が Shakespeare に興味を抱き続けていたことは、その作品 *Mr W.H.* 及び *The Truth of Masks* に明らかであり、また彼の五つの長詩が *Venus and Adonis* のスタンザ形式を用いているという指摘もなされている。<sup>(11)</sup> そして彼は晩年に “I have loved them [*Sonnets*]...not wisely but too well.”<sup>(12)</sup> と Othello の言葉を借りて述懐している。それにもかかわらず、Wilde における Shakespeare の、そして *Sonnets* の重要さがこれまで見過ごされて来たのは、Wilde の企みが功を奏したと言えよう。

我々は *Dorian Gray* は Shakespeare の *Sonnets* をモデルにした作品であると言うことはできない。“a poisonous book” は *Sonnets* であると同時に “a poisonous book”<sup>(13)</sup> と批評された *Dorian Gray* 自体となっている。Wilde の想像力の中での *Dorian Gray* の肖像画が Willie Hughes の肖像画であっても、*Dorian Gray* におけるそれは、あくまで *Dorian Gray* の肖像画以外の何物でもないのである。*Mr W.H.* において Wilde は Willie Hughes を主人公として *Sonnets* を書き替えた。*Dorian Gray* において Wilde が試みたことは、Wilde 自身が *Sonnets* を書くことであった。この作品自体を *Sonnets* とすることによって、彼はこの作品を現実の *Sonnets* と

の係わりを拒否した自律した作品たらしめた。そしてこの行為は彼の理念における最高の批評なのである。

Wilde は Sir Henry Wotton という Shakespeare とほぼ同時代の詩人の名をそのまま借り、*Dorian Gray* が彼の *Sonnets* であることを記念し、暗示したのではないだろうか。Lord Henry が Dorian Gray に “Your days are your sonnets.” (XIX, p.240) と言った時、*Dorian Gray* は正しく総括されたのである。Basil Hallward はある日、Dorian Gray に次のように告白する。

One day, a fatal day I sometimes think, I determined to paint a wonderful portrait of you as you actually are, not in the costume of dead ages, but in your own dress and in your own time. (IX, p.129)

この Basil の試みは Willie Hughes の肖像画を前にして、エリザベス朝の美青年 Willie Hughes から 19 世紀末の美青年 Dorian Gray を引き出した Wilde 自身の試みであったと言えよう。

#### 〈註〉

- (1) 以下 *Dorian Gray* と略記する。本論中の引用は *Dorian Gray*, Harmondsworth, Penguin, 1966 により、章数と頁数をカッコに入れて記す。
- (2) “The Artist’s Preface,” *Dorian Gray*, N. Y., The Modern Library, n. d., p.5.
- (3) Boris Brasol, *Oscar Wilde: The Man-The Artist-The Martyr*, N. Y., Octagon Books, 1975, pp. 197-198. Cf. Hesketh Pearson, *The Life of Oscar Wilde*, London, Methuen, 1946; Philippe Jullian, *Oscar Wilde*, trans. Violet Wyndham, London, Constable, 1969.
- (4) Burdett’s introduction to *Dorian Gray*, quoted in Charles C. Nickerson, “Vivian Grey and Dorian Gray,” *TLS*, August 14, 1969, p.909. なお、Nickerson は Basil Ward という画家の存在を否定している。
- (5) “Wasted Days,” *Complete Works of Oscar Wilde*, London, Collins, 1970, p.732. 後にこの詩は Lily Langtry をうたう “Madonna Mia” と改め

られ、1881年の *Poems* に収められた。美青年が女性に変えられると同時に、時間による破壊のイメージが抹殺されていることは注目される。

- (6) 以下 *Mr W. H.* と略記する。本論中の引用は “Mr W. H.,” *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*, ed. Richard Ellmann, N. Y., Vintage Books, 1970 により、頁数をカッコに入れて記す。
- (7) 芸術の世界は語られなければ存在しない虚構の世界であるという考え方は、Wilde の芸術観の基本である。Gide は次のような Wilde の言葉を記している。“Understand that there are two worlds: the one that is without one’s speaking about it; it’s called the *real world*. . . And the other is the world of art; that’s the one which has to be talked about because it would not exist otherwise.” André Gide, “In Memoriam,” *Oscar Wilde: A Collection of Critical Essays*, ed. Richard Ellmann, N. J., Prentice-Hall, 1969, p. 27.
- (8) この部分は1889年の雑誌版には見られない。Wilde は加筆はしても削除は殆んどしていないので、改訂版では矛盾した年代推定が共存しているが、1889年版では Willie Hughes は 1594年から5年に Shakespeare と出会ったとされている。(p. 158. 1889年版は “Mr W. H.,” *Lord Arthur Savile’s Crime and Other Stories*, London, Methuen, 1916による。) その時17才の彼は *Sonnets* 発刊の時31もしくは32才となる。*Dorian Gray* でもまた、改訂版の XII の初めの *Dorian Gray* の年齢が、雑誌版では38才ではなく32才となっている。(Stuart Mason, ed., *Oscar Wilde: Art and Morality*, London, J. Jacobs, 1908, p. 148) この二作品の改訂時期は重なり合っており、どちらがもう一方の改訂を促したのか決定する資料はないが、この二つの改訂に関連があることは疑えないと思われる。
- (9) Cf. “It [The portrait] is not a forgery at all; it is an authentic Clouet of the highest authentic value.” (Charles Ricketts に宛てた手紙。Wilde, *The Letters of Oscar Wilde*, ed. Rupert Hart-Davis, London, Rupert Hart-Davis, 1963, p. 250) この肖像画は1895年に競売に出されるまで Wilde の許にあったが、それ以後、行方が分らない。
- (10) Wilde, *Letters*, p. 313.
- (11) Epifanio San Juan, Jr., *The Art of Oscar Wilde*, N. J., Princeton U. P., 1967, p. 23.
- (12) Wilde, *Letters*, p. 789.
- (13) Mason, *Art and Morality*, p. 55.